How to Install and Use on the Cloud

by SparxSystems Japan

Enterprise Architect 日本語版
Web ブラウザ経由で製品を利用する環境の構築

（2023/01/10 最終更新）

目次

1. 概要 3
2. 免責事項 4
3. 前提条件 5
4. Amazon AppStream 2.0 の場合 6
4.1. 手順の概要 6
4.2. 手順の詳細 6
4.2.1. Windows イメージの作成 6
4.2.2. Enterprise Architect のインストール 6
4.2.3. ライセンスやオプションの初期設定 7
4.2.4. イメージの作成 7
4.2.5. フリートとスタックの作成 7
4.2.6. AppStream 2.0 クライアントアプリケーションのインストール 8
4.2.7. Enterprise Architect の起動 8
5. Microsoft Azure の場合 10
5.1. 手順の概要 10
5.2. 手順の詳細 10
5.2.1. ホストプールの作成 10
5.2.2. リモートデスクトップクライアントのインストール 11
5.2.3. リモートデスクトップにログオンし、Enterprise Architect を設定 12
5.2.4. アプリケーショングループとワークグループの定義 12
5.2.5. アプリケーションの起動 14

1. 概要

Enterprise Architect や RaQuest などの弊社(スパークスシステムズ ジャパン株式会社)の製品は、Windows 環境にインストールするアプリケーションです。利用するためには、Windows 環境が必要となり、またインストールするためにはその Windows の管理者権限が必要となります。

昨今、セキュリティ上の理由で管理者権限が容易に取得できない・実際に利用するマシンにインストールすることができない、などの制限のある組織も増えています。また、Linux や MacOS など、Windows 以外の環境を利用する例も増えています。Linux や MacOS では、Wine などのミドルウェアを利用することで Enterprise Architect を利用できますが、いくつかの非互換もあり、また RaQuest のようにこれらの環境には未対応の製品もあります。

このような場合に、Enterprise Architect や RaQuest などの弊社製品をクラウド上など外部の Windows デスクトップ環境にインストールしネットワーク越しに利用することも可能です。この方法の場合には、Window デスクトップ全体を参照し、その中でツールを動作させます。具体的な条件については、以下の内容をご覧ください。

よくある質問:10 在宅勤務でリモートデスクトップなどで利用できますか？
https://www.sparxsystems.jp/faq/faq_buy_lic.htm#lic14

別の方法として、Amazon が提供する Amazon AppStream 2.0 や、Microsoft が提供する Azure Virtual Desktop を利用することで、Enterprise Architect や RaQuest をクラウド上のマシンにインストールし、Web ブラウザや専用アプリケーションを利用することで、ローカル環境にインストールした場合と（ほぼ)同じように利用することができます。環境によっては Enterprise Architect や RaQuest のウィンドウのみが利用しているマシンに表示され、他のアプリケーションのウィンドウと同じように扱うことができます。また、Web ブラウザを通して利用することもできますので、利用する環境側の OS の制約がなくなります。

このドキュメントでは、Amazon や Microsoft が提供するサービスを利用した環境を試験的に構築し、動作を確認するための手順を紹介します。

2. 免責事項

このドキュメントの内容は、以下の点に同意いただける場合のみご利用ください。**このドキュメントの内容について実施した場合、この免責事項に同意したものと見なします。**

- 弊社製品以外のすべての内容は、標準サポートの範囲外となります。このドキュメントに記載していることであったとしても、弊社製品に直接関係する内容以外は、標準サポートの範囲外となります。
- この内容で説明する Amazon Web Service や Microsoft Azure の各種サービスは有償であり、利用に伴い利用料の請求が発生します。このドキュメントに記載の内容を作成すると、その作成内容を保持するだけでも請求対象となります。これらのすべての発生費用はお客様の負担となります。このドキュメントの内容に不備不足があり想定外の利用料金の請求があったとしても、弊社は一切の責任を負いません。
- このドキュメントは、動作確認を目的としたものであり、セキュリティなど動作確認以外の観点については一切触れません。しかし、設定の不備などによる情報の流出・想定外の利用料金の発生・ライセンスの不正利用などさまざまな問題が発生する可能性があります。発生するすべての問題についてはお客様の責任となり、弊社は一切の責任を負いません。さらに、万が一ライセンスの不正利用など、使用許諾契約に違反する内容があった場合には、使用許諾契約に従いライセンスの使用権を失うことになりますのでご注意ください。
- このドキュメントの内容は、このドキュメントを作成時の内容です。機能・画面・情報・料金などが変更されている可能性があります。

また、このドキュメントの内容は、フローティングライセンスの利用を前提とします。スタンダードライセンスは、特定の 1 名のみが利用可能なライセンスであるため、対象外となります。

このドキュメントで説明する仕組みを悪用することで、技術的には 1 つのスタンダードライセンスを複数名で利用可能な環境を構築することが可能となります。万が一、このドキュメントの内容を参考にしてスタンダードライセンスを複数名で利用できる

環境を構築することがあった場合には、一切の事情を問わず、使用許諾契約違反として即時に使用権を失う対応をいたします。絶対に行わないでください。(実際の複数名での利用の有無ではなく、環境の構築のみで使用許諾契約違反となります。)

なお、スタンダードライセンスは、個人としての購入の場合には、購入した本人のみが利用可能です。法人としての購入の場合には、退職や異動など恒久的に利用しない状況にならない限り、ライセンスの利用者を変更することはできません。購入本数を超えない場合でも、利用時ごとに利用者を変える行為は使用許諾契約違反となります。

3. 前提条件

このドキュメントの内容は、以下の前提があるものとします。この内容はこのドキュメントでは扱いません。

- Amazon Web Service や Microsoft Azure の各種サービスが利用できる状態であること
- Microsoft Azure を利用する場合には Azure Active Directory あるいは Active Directory が利用できる状態であり、利用する Microsoft アカウントと結びついていること
- 利用する環境から通信可能なマシンに Enterprise Architect のライセンスサーバが構築され、利用する環境からフローティングライセンスを取得可能であること
- 本来はユーザーごとの環境を構築し、ユーザーごとの Amazon/Microsoft 環境のアカウントでログインするように設定すべき点について、動作確認が目的のため、1 つの Amazon/Microsoft 環境のアカウントのみを利用すること

以下の説明では、Enterprise Architect をインストールする前提での説明となりますが、RaQuest など他の製品についても同じ内容が適用できると考えます。

4. Amazon AppStream 2.0 の場合

4.1. 手順の概要

Amazon AppStream 2.0 上に Enterprise Architect をインストールし、ローカルにインストールしたデスクトップアプリケーションと同様に利用できることを動作確認するまでの手順は以下の通りです。

1. Amazon AppStream 2.0 の管理画面で、イメージビルダを利用して、新規に Windows イメージを作成します。
2. 作成したイメージインスタンスに管理者アカウントでログインし、Enterprise Architect をインストールします。
3. 作成したイメージインスタンスにテンプレートアカウントでログインし、ライセンスやオプションの初期設定などを行います。
4. 作成したイメージインスタンスで Enterprise Architect をアプリケーションとして登録し、イメージを作成します。
5. フリートとスタックを作成し、ユーザーを定義します。
6. Windows 用 AppStream 2.0 クライアントアプリケーションをインストールします。
7. ログインし、Enterprise Architect を起動します。

4.2. 手順の詳細

4.2.1. Windows イメージの作成

まず、Enterprise Architect をインストールするために必要となる Windows 仮想環境を作成します。Windows 環境の OS は Windows Server のみが選択可能ですので、イメージビルダから作成する場合には、Enterprise Architect の動作保証のある OS を選択してください。

Enterprise Architect 必要システム構成（システム要件）
https://www.sparxsystems.jp/products/EA/ea_sysreq.htm

4.2.2. Enterprise Architect のインストール

イメージインスタンスが完成したら、管理者としてログオンし、Enterprise Architect

をインストールします。イメージビルダの「Connect」ボタンを押すと Web ブラウザで新規にタブが開き、デスクトップ画面が表示されます。事前にダウンロードしておいたインストーラファイルを転送し、インストールしてください。

ライセンスの設定などはこの段階では行いません。

4.2.3. ライセンスやオプションの初期設定

次に、テンプレートアカウントでログオンし、Enterprise Architect を起動してライセンスサーバやアクティベーションコードの設定を行います。また、必要に応じて Enterprise Architect のローカルオプションの設定なども行います。

なお、今回は動作確認が目的のため、上記のように直接設定する手順としていますが、実際には複数名が複数の仮想環境を共有して Enterprise Architect を利用することになるかと思います。そのため、以下のページに記載の方法で、レジストリや個人ごとのフォルダの参照・保存先を、個人ごとの HomeFolder や OneDrive など恒久的に維持される場所に変更する必要があります。

ヘルプ: 設定情報の保存先を変更する
https://www.sparxsystems.jp/help/16.0/commandlineparameters.html

4.2.4. イメージの作成

設定が完了したら、再度管理者アカウントでログオンし、デスクトップにあるツールを利用してイメージとして確定します。このツールで、どのアプリケーションを利用可能にするかの指定ができますので、対象のアプリケーションである Enterprise Architect の実行ファイル「EA.exe」を指定してください。また、前項にある、設定情報の保存先の変更指定をパラメータとして設定してください。

4.2.5. フリートとスタックの作成

イメージの完成後、そのイメージを参照するフリートと、そのフリートに結びつくスタックを作成します。また、必要に応じて利用するユーザーを作成します。この手順については、Enterprise Architect に特有の設定はありません。

4.2.6. AppStream 2.0 クライアントアプリケーションのインストール

AppStream に追加したアプリケーションは Web ブラウザからでも操作は可能ですが、Windows 環境であれば、操作性の面や印刷時のプリンタの利用など、実行するローカル環境との親和性の面で、専用のクライアントアプリケーションをインストールする方が優れています。他の環境でも、専用のクライアントアプリケーションが利用できる場合には、専用のクライアントアプリケーションを利用することを推奨します。

Windows 環境用の専用のクライアントアプリケーションのインストーラは以下の URL からダウンロードできます。

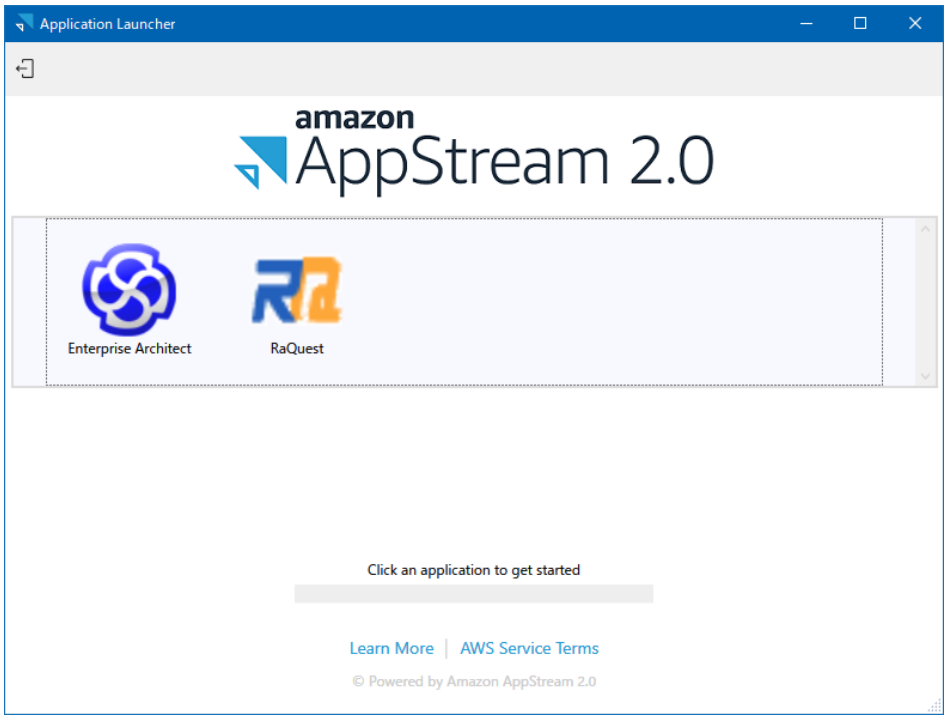
https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/appstream2/latest/developerguide/client-application-windows-user.html

USB ドライバのインストールも可能ですが、Enterprise Architect の利用においては USB ドライバは不要です。

4.2.7. Enterprise Architect の起動

AppStream 2.0 クライアントアプリケーションを起動すると、接続のための URL の入力画面になります。この URL は、AppStream 2.0 の管理画面のスタックの定義一覧から入手できます。「Start in native application mode」にチェックを入れることで、ローカルで実行するアプリケーションと同等に近い動作になります。

接続すると、以下のように設定したアプリケーションのアイコンが表示され、ダブルクリックすることで起動できます。フリートをオンデマンド起動にしている場合には、初回起動時は 1 分～2 分程度の時間がかかります。



5. Microsoft Azure の場合

5.1. 手順の概要

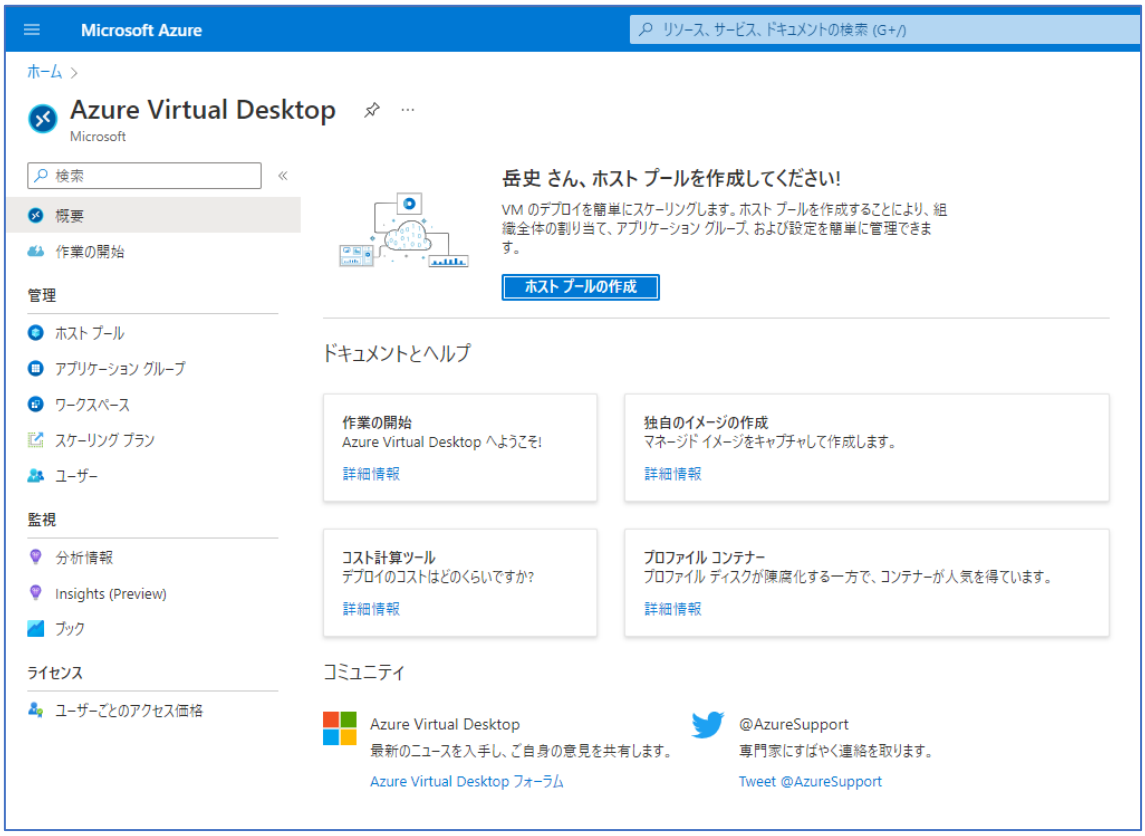
Azure 上に Enterprise Architect をインストールし、ローカルにインストールしたデスクトップアプリケーションと同様に利用できることを動作確認するまでの手順は以下の通りです。

1. Azure Virtual Desktop の管理画面で、「ホストプール」を作成します。
2. 利用するマシンで、利用する OS に合わせたリモートデスクトップクライアントをインストールします。
3. 管理者アカウントでリモートデスクトップにログオンし、Enterprise Architect や RaQuest など、利用するアプリケーションをインストールし利用可能な状態にします。
4. アプリケーショングループに利用するアプリケーションを登録し、ワークスペースを作成し、外部から利用可能な状態にします。
5. リモートデスクトップクライアントから、アプリケーションを起動します。

5.2. 手順の詳細

5.2.1. ホストプールの作成

まず、Azure Portal から Azure Virtual Desktop に移動し、「ホストプールの作成」ボタンを利用してホストプールを作成します。



作成する場合の注意点として、「ホストプールの種類」で「プール」を指定するようにしてください。「個人用」を選択した場合、利用できるアプリケーションは MSIX 形式のインストーラが必須となりますが、Enterprise Architect には MSIX 形式のインストーラの提供はありません。

仮想マシンは、費用と性能の兼ね合いで最適なものを選択してください。なお、費用が安い B1s や B1ms は、こちらで試した限りでは、Enterprise Architect の利用においては、性能面で現実的な利用には向かないと感じました。

上記以外の点については、Enterprise Architect の利用に固有の設定はありません。

5.2.2. リモートデスクトップクライアントのインストール

次に、利用するマシンにてリモートデスクトップクライアントをインストールします。Windows のクライアントのインストールについては、以下のページをご覧ください。

https://learn.microsoft.com/ja-jp/azure/virtual-desktop/users/connect-windows

Windows 以外の OS についても、上記 URL のページの左側にあるメニューから関係す

る内容を参照できます。

5.2.3. リモートデスクトップにログオンし、Enterprise Architect を設定

インストールが完了し、Microsoft アカウントでログオンすると、リモートデスクトップクライアントには「SessionDesktop」が表示され、作成指示に指定した管理者アカウントで、作成した仮想環境のデスクトップにログオンできます。

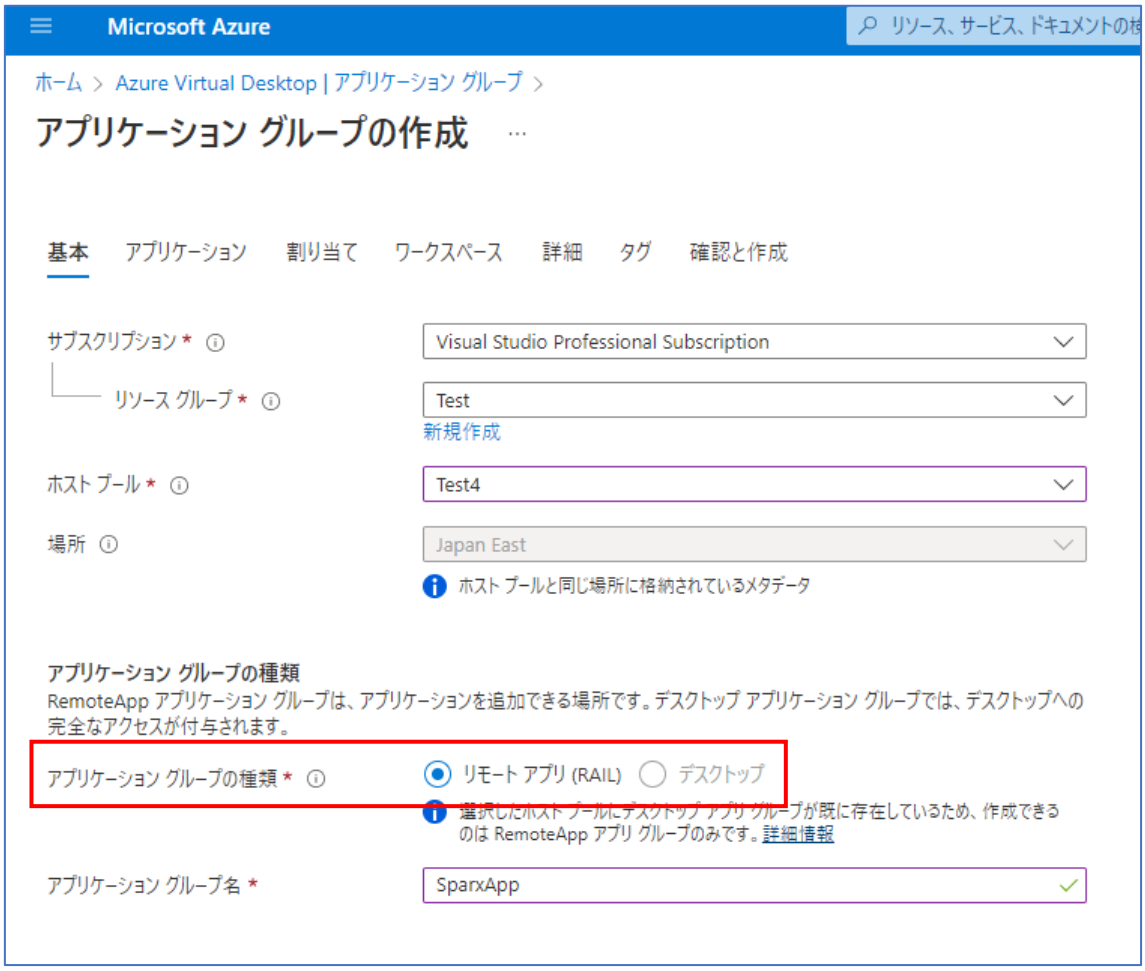
今回は動作確認が目的のため、この環境に Enterprise Architect をインストールします。インストーラは、通常の Enterprise Architect のインストーラを利用します。インストール後起動し、ライセンスサーバの設定やアクティベーションコードの設定を行い、起動できることを確認します。

なお、今回は動作確認が目的のため、上記のように直接インストールを行う手順としていますが、実際には複数名が複数の仮想環境を共有して Enterprise Architect を利用することになるかと思います。そのため、元となる仮想環境のイメージに Enterprise Architect をインストールする必要があります。また、ライセンスサーバの設定などは、ユーザーごとのレジストリに事前に設定する等の対処が必要です。レジストリ等の環境がログオンごとに変わる場合には、以下のページに記載の方法で、レジストリや個人ごとのフォルダの参照・保存先を、個人ごとの OneDrive など恒久的に維持される場所に変更する必要があります。

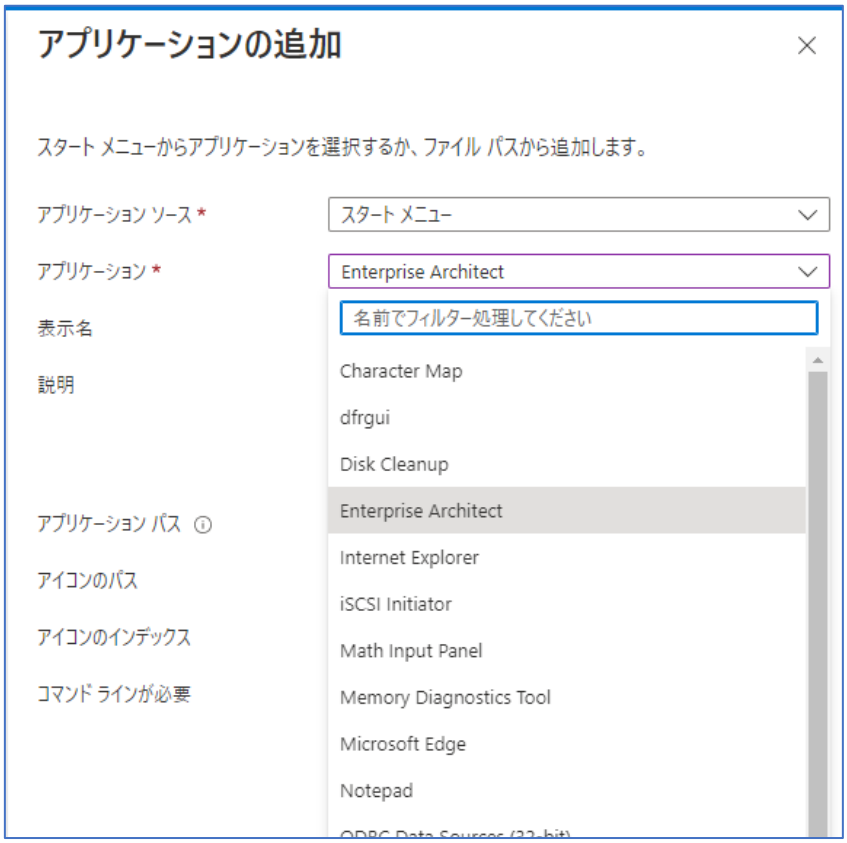
ヘルプ: 設定情報の保存先を変更する
https://www.sparxsystems.jp/help/16.0/commandlineparameters.html

5.2.4. アプリケーショングループとワークグループの定義

Enterprise Architect のインストールが完了すると、Enterprise Architect を含むアプリケーショングループが作成可能になります。作成する際には、「アプリケーションの種類」を「リモートアプリ(RAIL)」に設定します。



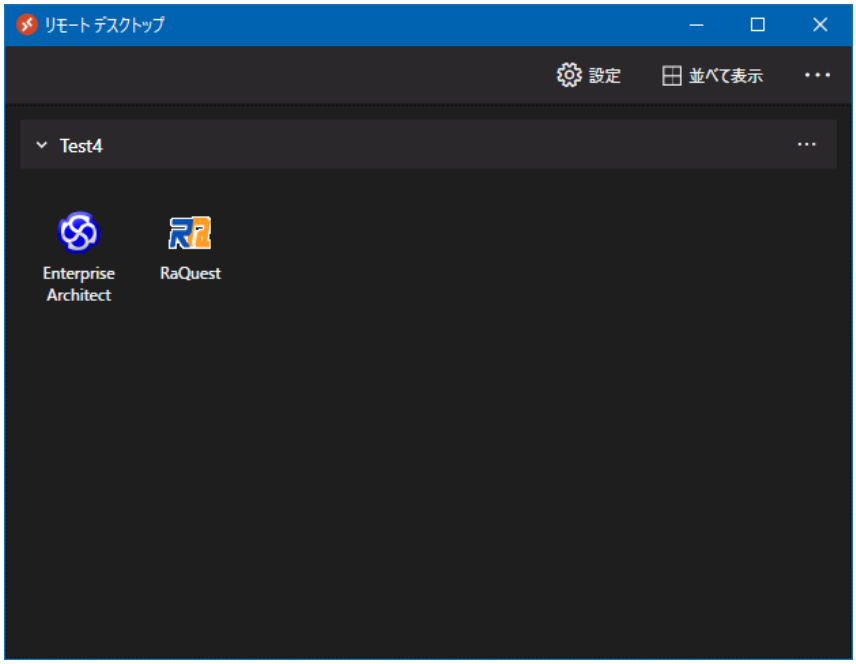
これにより、アプリケーションの追加時に「アプリケーションソース」として「スタートメニュー」が指定可能になり、Enterprise Architect が選択できます。



上記以外には、Enterprise Architect に固有の内容はありません。ユーザーの指定などを行い、また作成したアプリケーショングループを含むワークスペースも作成します。

5.2.5. アプリケーションの起動

すべての設定が適切に完了していれば、リモートデスクトップクライアントを起動すると、リモートデスクトップクライアントにはインストールしたアプリケーションのロゴが表示され、ダブルクリックすることで起動できます。
(実行時に認証を要求される場合には、今回は管理者の ID とパスワードを入力することで、事前に設定した内容で Enterprise Architect が起動します。)



リモートデスクトップクライアントで起動した Enterprise Architect からは、実行しているローカルマシンのドライブを参照し、プロジェクトファイルを開くこともできます。しかし、通信速度の関係で動作が全体的に遅くなるため、リモート側の環境にプロジェクトファイルを配置するか、Pro クラウドサーバなどリモート環境から高速に参照できるプロジェクトを作成し利用することをお勧めします。

(フローティングライセンスの管理に Pro クラウドサーバを利用している場合には、その Pro クラウドサーバにプロジェクトを追加し利用する方法が、手間が少なくお勧めです。)